曹洞禅ジャーナル

法眼

第6号　2000年5月

共に法輪を転ずる

「道元禅師シンポジウム・イン・スタンフォード」

秋葉玄吾
北アメリカ開教総監

世の中に真の人やなかるらん
　　限りも見えぬ大空の色　（傘松道詠）

The true person is
Not anyone in particular
But, like the deep blue color
Of the limitless sky
It is everyone, everywhere
In the world.　（スティーブン・ヘイン訳）

道元禅師様の御歌です。

「真実の人は特別の人ではない。その人は、この限りのない大空の、深くあおい色のような、この世界のどこでもの、だれでもである。」との意味でしょうか。

昨年１０月２３日、２４日とスタンフォード大学に於いて、「道元禅師ご生誕８００年慶讃シンポジウム」が海外ではじめて開催されました。北アメリカの主な道元禅の指導者、研究者７名及び日本の方、３名のスピーカーにより道元禅師様に関する発表をしていただきました。引き続き、２５日、２６日とアメリカの曹洞禅関係の学者の先生方１７名参加のもとカンファレンスが開かれました。

幸いなことに参加者の多くの方々から、道元禅師様のご生誕８００年の慶讃に適しい記念すべき行事であり、大変勉強になったとの評価を受けました。実施関係者一同、道元禅師様もご嘉納いただけたのではないかとひと安堵いたしました。

この記念の行事を実施するにあたり、多大の努力を払っていただいた関係者各位、さらに会場に足を運び、その成果を分かちあっていただいた多くの聴衆の皆様にこの紙上を借り、深甚より感謝申し上げます。

道元禅師様の法の輪が大きく描かれ、同法同修の諸兄弟が、法の交流をそれぞれに成し、理解を深め合った有意義なシンポジウムであったと、実施の任に当たった我々も満足いたしております。これもひとえに多くの皆様の法の愛の賜と、道元禅師様への欣慕の表れであろうと法悦を感じている次第です。

道元禅師様は「仏祖」の巻で、

「それ仏祖の現成は、仏祖を挙拈して奉覲するなり。過現当来のみにあらず、仏向上よりも向上なるべし。まさに仏祖の面目を保任せるを拈じて、礼拝し相見す。仏祖の功徳を現挙せしめて住持しきたれり、体証しきたれり。」と述べられます。

過去、現在、未来のいつの時代にも、いずれの国にも、宇宙の無限の過去から実在した原理（仏法）を、釈尊と同じように、只管打坐を正門として修行求道し、単伝する「祖師」は断続しない、と示されたのでしょう。

私達は幸い、今、この現在「仏祖の面目を保任せるを拈じて」いる同時、同道、同行の仏家の清衆と申せます。

さらに道元禅師様は「衆寮箴規」の冒頭に述べられます。

「同行同修のものは、皆お互いに父母である、兄弟である、骨肉である、師僧である、善知識である、という慈悲親密の心を以て、お互いにいつくしみ、愛し合い、自らを顧み、他に同情を寄せるようにし、心の内で、有り難い、辱けないという心持ちを有って居るならば、きっと心も和らか、顔付きもにこにこして、快活に、各自は一色の弁道に精進出来る。」と諭します。

「仏向上よりも向上なるべし」の一点において、今、現在、この私達はアメリカ、日本の区別なく、歴史伝統の相違なく、互いに父母、兄弟、骨肉、師僧、善知識であると申せます。

「仏祖の面目を保任せるを拈ずる」の同法同修の時、私達は「唯仏与仏」と互いに礼拝いたします。そして未来には「祖師」の供養を受けるでしょう。

今回のシンポジウムは、そういったことを深く私達に気付かせてくれました。さらに２１世紀の未来にも、兄たる日本の曹洞宗と、弟たるアメリカの曹洞禅とあいたがいに手を携え、「仏法」のその輪を新しく組み立てるべきであると教え、伴にその作業が出来ることを示し、その法輪を力を合わせ転じていくことが出来ると語っておりました。

限りもみえぬ大空のもと、２１世紀の近未来に、この広大なアメリカの大地の上を、正法輪が転ぜられて、その梵音が無限に響いてくるのを感じます。

今後とも開教センターへの皆様のご支援をお願い申し上げ、２０００年の挨拶とさせていただきます。

「実践」と「思索」
ー道元禅師シンポジウムに参加してー

石井清純
駒澤大学仏教学部助教授
スタンフォード大学仏教研究所 客員研究員

私がこのシンポジウムの存在を知ったのは、一昨年の暮れのことであった。それは、ちょうど私が、平成12年度の在外研究先として、スタンフォード大学を考え始めた頃のことだったのである。

それは、『宗報』に掲載された小さな囲み記事であったが、私にとっては、現地の宗教的意識に触れる格好の機会であり、即座に参加の意思を固めていた。

しかし、その後、情報はなぜか少なく、日本においては、その存在は神秘のヴェールに包まれているようであった。

開催期日や内容をはじめ、参加方法などがまったく掴めない。唯一、スタンフォード大学のホームページにおける開催告知によって、それが確実に開催されることが分かる程度だったのである。

ともあれ、曹洞禅インターナショナルをはじめ、諸方面の方々のご尽力により、なんとか参加にこぎつけたのであるが、後に、日本からの参加者が50名に限定されていたことを聞き、その中の１人に加わることのできた幸運に感謝している次第である。

具体的なシンポジウムの内容は、いろいろな意味で、それは私の予想をはるかに上回るものであった。

まず、驚かされたのは参加者の数である。

正直なところ、「道元」という限定された題材に、これほどの人が集うとは思ってもいなかった私は、会場一杯の聴衆に目を見張った。

広く米国各地から、この日のために駆けつけた方々は、さらに驚くべき熱意を持っておられた。それは、聴衆から発せられた、するどい質問の数々によって証明されていたように思われる。

いま、具体例を挙げることはしないが、理論と実際の矛盾点をするどく突いた質問に、発表者が答えに窮する場面も見られたのである。

このような、宗旨の根幹に関わる重要な質問が、さらりと導き出されるということは、多くの実践者が、理論の中に身を置きつつ、現実の自己を磨いておられることの現われであろう。このような聴衆の質の高さが、私の第２の驚きだったのである。

このような充実したシンポジウムが開催されるにあたって、その準備・運営に当たられた方々のご努力は、並大抵のものではなかったであろう。今、この場を借りて、このような、すばらしき会に参加させていただいたことに感謝し、多くのスタッフの方々のご苦労をねぎらわせていただきたい。

最後に、私が最も印象深かったことについて述べさせていただきたい。

それは、シンポジウムの中で、研究者と師家(実践者)という２つの立場が、しっかりと構築されているように見受けられたことである。

私見によれば、このような研究と実践の分化は、日本においては、昭和に入ってから、はっきりしてきた現象と思われる。そして、それは同時に、道元研究の成熟を示す指標となっているのではないかと考えている。また私は、この分化を極めて日本的なものとして捉えていた。

しかし、それが米国において既に見られるということは、何を意味するのであろうか。第一には、その展開形式が、日本と歩みを同じくしていることを示しているのであろう。そしてまた、道元禅師の思想に対する信仰と研究とが、現在の日本と同様に、それぞれに、しっかりとした歩みを始めていることをも示していよう。

もちろん、この両者があまりに両極化してしまうことは、けっして良いことではない。あくまでも両者は、対等の関係を持って対峙しつつ、互いの理論的根拠となり、また現実的な証明となることが望まれるであろう。

これは、曹洞宗においては、哲学書としての『正法眼蔵』と、実践の書としての、『知事清規』などの清規や、あるいは『永平広録』の存在に充てることができる。

そして、それらが単純に一元化されずに、ここに息づくところに、真の「曹洞禅」が展開されると、私は考えている。

これは、換言すれば「行学一如」ということになるであろう。そして、上に見たように、この「行」と「学」とは対等に対峙する。それゆえ、その「一如」は「不即不離」でなければならない。

ただし、今の私は、この「不即不離」を、どのような形で具体化し、実践するのかという答えを持たない。しかしシンポジウムに参加して、その一つの道標を、米国の禅に見いだすことができるのではないかと感じたのである。

私事で恐縮であるが、これを、４月からのスタンフォードでの在外研究の、１つの課題としてゆく所存である。

１つだけ残念だったのは、日程が、「教化学大会・宗学大会」と重なって、曹洞宗現代教学研究センターの若手研究者が参加できなかったことである。今後、是非とも彼等にも、私と同様の機会をお与えいただくよう、各方面にお願いしておきたい。

最後に、もう一度、このような貴重な機会をいただいた各方面に、また、拙い感想をご掲載いただいた開教センターに誠心より感謝申し上げ、結びとするものである。

道元禅師シンポジウムの印象

彰顕・ワインコフ
デコラ禅センター

私は道元禅師シンポジウムに参加する機会を得たことをとても感謝しています。あのシンポジウムは確かに、正しい方向に向かっての１つのステップでした。

私の道元禅師シンポジウムに対する印象は、私達が滞在していたホテルに足を踏み入れたとたんに始まりました。私は久しく会ったことのなかったアメリカ人及び日本人の友人達を見つけたのです。これらの顔と顔を合わせての出会いは、この道元禅師の生誕を慶讃するシンポジウムにおいて貴重な瞬間でした。私はこの世界的な共同体での集いにおいて、私達全ての歩む道が出会うのは、なんと素晴らしいことだろうと思いました。

アメリカで行われたこのシンポジウムに日本から来られた多くの重要な僧職の方々にお会いできて大変光栄でした。幸せなことに私は、（曹洞宗宗務庁国際課の）伊東俊彦課長と席を伴にすることが出来ました。課長の英語は私の日本語と同じくらいでした（たどたどしいという意味ですが）が私達は心で分かり合えました。日本がそれほど遥か彼方だとは感じませんでした。シンポジウムは東と西を結ぶ橋となりました。

また、アメリカ国内の各地からやって来た沢山の法の兄弟や姉妹と出会えたことは素晴らしいことでした。私は、何年も会わなかった人達との再会を楽しみました。このシンポジウムのおかげで、多数の人々が集うことが出来ました。

私はシンポジウムで行われた様々な発表を味わいました。発表のためにそそがれた学識と努力は、大いに評価されるべきものです。広範囲に渡る色々な題目があり、私が今までに読んだり聞いたりしていた多くの人達と出合うことが出来る素晴らしい機会を与えてくれました。

しかし、演壇上では発表されなかった１つのエピソードがありました。それは、長い灰色のひげをはやしジーンズを着てピックアップトラック（小型トラック）を運転していた老人が私に与えてくれたものです。彼は初日の早朝の会合に出るために、歩いていた私をトラックに乗せてくれたのです。私も彼も公会堂がどこにあるのかわかりませんでした。私達は会場に行く道を一緒になって見つけました。トラックから降りようとした私に、彼は「あなたにあげる物があるよ。」といいました。彼はブリーフケースをつかんで、私の師匠である故片桐大忍老師についての話が書かれた紙片を引っぱり出しました。片桐老師は１９８２年か８３年にカリフォルニア州のソノマにある現成寺（寂照・クワン老師の禅センター）で道元禅師についての４日間の勉強会を指導されました。

その話というのはこうです。

道元禅師の勉強会の３日目に、ひとりの女性が片桐老師の話を遮って質問をしました。「老師！」片桐老師は話を中断されました。「老師、私はあることで悩んでいます。私はこの場所に３日間も坐っています。書いたメモが小さな山のようにあります。真夜中に目を覚まして、この人（道元禅師）はどのような人だったのかと考えています。私の家の台所は（道元禅師の教えを学んだことによりこれからは以前と）同じようなことはないでしょう。でも、私には、道元禅師はいったい美しい女性にひかれたことがあるのかどうか、気がかりなのです。禅師はお酒に酔った事があるのでしょうか。禅師は一度でも笑ったことがあるのでしょうか。」

片桐老師は美しい流動的な独特の動きで床に紙を置き、眼鏡を上げて、そのフレームを鼻の上に移し変えました。老師はその女性をしばらくの間じっと見つめ、右手を挙げて、天井の方へひとさし指を伸ばし、それを前後に、逆さの振り子のように動かして言いました。「道元禅師は、あなたにキャンディーを与えない。」

太平洋の両側からこのシンポジウムを主催された方々の、その勇気と努力に私は拍手喝采します。道元禅師は（中国に行かれた航海だけでなく）もう一度、公海を旅されていたのです。

道元禅師シンポジウム：真に歴史的な出来事

グリフィス・フォーク
サラ・ローレンス大学

１９９９年１０月にスタンフォード大学で行われた道元禅師シンポジウムは、私にとって特別に意義深いものでした。曹洞禅の進展と普及における真に歴史的、画期的な出来事であったこの催しを見ることができ、また参加することができたことは大変幸せなことでした。もちろん、親である日本の曹洞宗教団と、子供である多かれ少なかれ独立した西洋の多様な曹洞系の禅センターとを隔てる、地理的、文化的、そして言語的な障壁が存在しています。また曹洞宗の教えに歴史的或いは批判的に関わっている学者達と、毎日の生活の中で、現実的に曹洞禅の教えを実践に移していこうと努力している禅の指導者や修行者たちとを分け隔てている違った種類の断層もあります。日本の曹洞宗と親密に関係しているアメリカ人として、そして、北アメリカに於て禅の共同体の発展に補足的な役割を担っている学者として、太平洋の両側から来た修行者と学者が集って、道元禅師の生誕を祝い、そしてお互いについて、お互いからどのように学びあえるのかを見ることができたことは、特別にうれしいことでした。

アメリカの曹洞禅（１）
打坐の途方もない多様性

ジョン・マクレー
インディアナ大学

私は、坐禅は非常に単純な物だといつも考えていました。と言っても毎朝起きて坐ることが、常に簡単なことだというのではなく、５日間の摂心を通して、膝や背中が激しい苦痛に悲鳴をあげなかったというわけではないのですが。少なくとも、身体的にも心理的にも打坐の仕組みはとても単純にみえます。安定し、心地よく端坐し、そして呼吸に集中するか、只管打坐で考えようとも考えまいともしないでただ坐るか、単にそれだけのことです。もちろんそれを実際に行ずるのは、口で言うほど簡単なことではありませんが、そのプログラムの作成に関しては、やはり基本的にとても単純なのです。

そういうわけで、私は質問を始めました。もっと具体的にいうと、昨年の夏、私は３年計画でアメリカに於ける曹洞禅を概観する調査を始めました。「調査」といっても、大げさな統計的分析をしようというのではありません。もちろん、我々がまだ余り気付いていないような何か新しい動向があるかどうかが見えるように統計学的な、あるいはそうした禅センターの活動に参加する人々についての資料は集めるつもりです。例えば、最近多数の新しく認められた禅指導者がどんどんと出現していることが、どんな影響を与えるのでしょうか？近頃チベット風の仏教の実践が全てのマスメディアの注意を文字通りむさぼり食っています。そしてそれは禅よりも遥かに目に付きやすいのです。それと比較して、私の印象では、アメリカの禅は静かに草の根レベルで成長し、国のあちこちで力強い共同体を築きつつあるように見えます。そして我々は「喪失の世代」について語るのを常としていたのですが、（レーガンの時代が精神的な共同体にしたことは、それほど極端なやり方ではなかったにしても、中国で文化大革命がしたことと大して違わなかったのです。）１０代や２０代の人達が禅に帰ってきつつあるように見えます。（体中に４０以上ものピアスを付けている、若い禅修行者とのインタビューについて話しましょうか？彼女は自分の指導者や仲間の修行者について、「誰も私がどんなことをしていたのか知らないのよ。」と言いました。）好奇心をそそるのはこうしたことだけではありませんが、私が皆様にお話する必要はないでしょう。

私が本当に興味を持っているのは、彼らが坐蒲の上に坐っている時、一体実際に何をしているのか、そしてそれについて彼らがどのように考えているのかについて、曹洞禅の修行者達と語り合うことです。何故、人は１炷３０分ないし４０分の間何もするまいと決心するのでしょうか？ましてや週末、あるいはまるまる１週間の摂心で坐り続けたりするのはどうしてなのでしょう？この企画において、私は、彼らの指導者たちが彼らのなすべきことについて何を教えたのか？あるいは、日本や中国の精神修養の敬うべき手本となる人々がどのような仰々しい哲学的な‘‘ひねり’’をその修行の上に加えたのか、等には全く関知しません。誤解しないで下さい。私は自分が正式な曹洞禅の宗派主義者だとは考えていませんけれども、私は道元禅師に宗教思想家として、そして指導者として、深い感銘を受けました。それだけのことです。もし私が、道元禅師が何を考え、何をしたかを知りたければ、私は禅師の著作とその門下の人々が禅師についてどのようなことを言ったのかを研究すればいいのです。

現時点では、私はアメリカ人の禅の修行の現状に焦点を当てています。アメリカ人の修行者達が坐蒲の上でしているのは何なのか、そして彼らはそれをどのように理解しているのだろうか？

私はインタビューでこの質問を問いかけ始めたばかりです。しかし、それに対する人々の返答の著しい多様性と深さにすでに驚かされています。おそらく、これは私が調査の為に訪れたのが、相互に大変違った特徴をもった場所であったことの結果でしょう。そして信じていた

だきたいのは、私はまだこの調査を開始したばかりなのだということです。昨年の夏、この地球上で最も親愛なる旧友の１人であり、北アメリカ開教センターの所長である奥村正博師によって組織された翻訳作業に参加しました。またモンテベロ曹禅寺のトム・倉井師、サンフランシスコ禅センターの太源・ダン・レイトン師、セバストポールのストーン・クリーク禅堂の慈照・ワーナー師等もそれに加わりました。翻訳作業をする会合の合間に、時間をみつけて、私達は何度か非常に実り多いインタビューを持ちました。それから、その秋に私は２つの極端に違った修行道場と、もう１人の古い友人を訪ねました。マサチューセッツ州の北西部にあり、藤田一照師が指導するヴァレー禅堂；ニューヨーク州マウント・トレンパーにあり大道・ローリ師が指導する禅マウンテン・モナストリー；そしてもう１人の旧友、ボストンにあるビーン・タウン・サンガの池田永晋師です。

私が聞いたことの中の最も根本的な相違は、私が訪れたグループの違いからくるものかもしれません。林の中にある小さな修行道場であるヴァレー禅堂は、その存在を全く宣伝せず、誦経も説教もない、長時間の坐禅だけの簡素な差定に従って修行しています。私は５～６人の修行者とかなり深いところまで話しました。大規模で、よく組織された共同体である禅マウンテン・モナストリーは、禅の訓練について高度に組織化されたアプローチと多彩な研修や講座を持ち、広く外部に対する活動を展開しています。そこで私は新しく入った人から、長年の安居者までの１０数名の修行者にインタビューを行いました。将来的には、大規模な修行道場から居間で坐っているような小さなグループにいたる、曹洞禅のグループを訪問したいと考えています。

それでは禅修行者は、実際に何をやっているのでしょうか、またそれについてどのように考えているのでしょうか？

まず第１に、数息観や端息観をしている人々、只管打坐をしている人々に加えて、公案を拈提している人々もいます。公案の修行と言えば、臨済禅から来たと考えがちで、少なくとも現代ではその通りです。しかし、学者や他の東アジアの禅の伝統に詳しい人達がどのような区別を作ったとしても、一般の人々がいつも曹洞と臨済の間に明確な区別をしているわけではありません。もちろん、この宗派的なレッテルを避けることは、道元禅師や他の歴史的人物からまっすぐにきています。

第２に、「只管打坐」は多様な禅を含んでいます。（残念ながら！）。１人の長年参禅している人は、坐禅中に何をするのかは、その時に彼の生活にどのようなことが起こっているかによる、と言いました。ただ自分の考えを観察していることもあるし、今問題にしていることを心の中で転がしていることもあるし、呼吸に集中することもあるし、音を出さずにマントラを唱えることもあるというのです。このような融通性はおそらく例外でしょう。そして、その問題の人物は、坐禅に関しては豊富な経験の持ち主です。何回も摂心をしただけでなく、過去２５年間に朝坐禅をしなかったのは２，３回だけだということです。

第３に、何人かの参禅者にとっては坐禅をするというそのこと自体が、自分のパーソナル・アイデンティティーの全体的構造を静かに支えてます。私は殊にボストンに住む日本人のホワイト・カラーの労働者のことを考えています。彼は坐禅は彼にとって伝統的日本文化と自分とを結びつける手段だと考えています。彼はアメリカに来てから初めてその結びつきを持つことが出来たと言っています。彼自身の場合は特殊なのかもしれませんが、多数の似たような話しがあることでしょう。

第４に、何人かの人々にとって坐禅は近づくことの難しいまた説明しがたい感情的あるいは人格的な深さを持っています。このことは、我々全員にとって疑いなく真実でしょう。しかし、ある非常に創造的でダイナミックな知性を持っている人が、坐禅は彼女の心がその心自身を真実の深みにおいて捉えることが出来る程に静まる唯一の時間だと言った時には感動しました。そしてこれはただ単に有り難い贅沢であるだけでなく、彼女の生活の最も貴重な中心点なのです。最近彼女は、Eメールを私によこしてこう言いました。彼女にとって、「禅は５つの基本的な食物群の１つである。」と。

この２、３年の間に、他の色々な禅センターを訪れ、新旧を問わずできるだけ多くの修行者と話をするつもりです。私は他の様々な禅のアプローチの仕方について学ぶこと、そして全く予期しないような仕方で、修行の多様性を理解するであろうことを十分期待しています。おそらく、予期せぬことを十分に期待するということが、私のタイプの禅といって間違いないでしょう。私自身の禅ではありますが、先に述べた女性の言葉のように「基本的な食物群」の一部分なのです。

私の『坐禅参究帖』（５）

藤田一照
パイオニア・ヴァレー禅堂

《断想　１５》「坐相降臨」

「坐禅
　　人間が
　　人間のために
　　何もしない　姿だから
　　人間が
　　人間から解放されて
　　仏になります」
　　（小林大二『いのちのうた　坐禅讃歌』
　　龍源社より）

＊

「少住為佳―ちょっと一服すればいい。人間をちょっと一服したのが仏じゃ。人間がエラクなったのが仏じゃないぞ。」（沢木興道）

＊

（上のお２人の言葉の中に使われている「人間」という語はすこし意味が一般的すぎて趣旨があいまいになる恐れがある。「仏」と対応させるのなら、「人間」というより「凡夫」とか「衆生」というもっと明確な規定内容をもった仏教用語の方が適切だろうと思われる。お２人がここで意味せんとしている「人間」は実はこの「凡夫」・「衆生」としての人間のことであろう。こういう理解にもとづいて、ここでは「人間」という語を「凡夫」に変えて使わせていただく。）

「坐は仏行なり」（『正法眼蔵随聞記』）と言われる。しかしそれが観念ではなく現実のものとなる時には、上でいわれているような、「凡夫のために何もしない」、「凡夫であることを一服する」という「凡夫性の放棄・否定」という契機が、必ず坐禅の中にあることを見落としてはならない。そこをいい加減にすると、みずからの「凡夫性」への「甘やかし」や「迎合」が生まれ、坐禅修行において、「手ごころ」や「妥協」が必ず起こって、坐禅の変質につながっていくからだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

１９７９年夏、当時、発達心理学の大学院生であった私は自分が主催していた「発達理論研究会」のメンバーと夏合宿をするために、長野県の小諸を尋ねた。みんなで、藤村の詩で有名な小諸城址懐古園を散歩した時、奇妙な光景に出くわした。

変なおじいさんが天幕の下で七輪を前にしてじっと坐っているのだ。それも普通に坐っているのではなく、なんというか威厳に満ちた独特の恰好で。「もしかしたらあれ、坐禅をやっているのかもしれないぞ。」と思いながら遠くから眺めていると、そのおじいさんがこちらをちらりと向いて何かを口に当てた。そしてなにやらピーピーと音を出しはじめた。「葉っぱでなにかメロディをふいているわ。」「乞食にしては変わっているなあ。」などとひそひそ話をしながら、我々はそこから遠ざかった。

東京にもどってきたあとも、そのおじいさんのことが妙に印象に残っていたので、野口体操教室の仲間と雑談している時にそのことを話した。すると１人の女性が、「あらっ、その人きっと私の親類のおじいちゃんがお世話しているお坊さんよ。横山祖道という名前で、沢木興道という偉い老師さまのお弟子だそうよ。草笛禅師ともいわれているわ。その人の色紙や手紙をみせてもらったことがあるの。」と言いだした。

「そんな人なら話しかければよかった。俺って人を見る眼がないなあ。」と悔やんだが、「来年も８月に合宿を小諸でやるから、その時は絶対会って話を聞こう。」と気をとりなおし、楽しみにその時を待っていたのだった。しかし翌年６月に示寂され、とうとう直接お話をする機会を逸してしまった。

ところが、その後、安泰寺に入って１年目の夏、驚いたことに、その祖道老師の外護者である「おじいちゃん」と東京で一緒に暮らしている子どもたちが寺に遊びに来たのだ。その子供たちの遊び相手になったことがきっかけで、その「おじいちゃん」とも親しくおつきあいさせていただくことになったのだから、因縁というのは不思議なものだ。

東京へ行く機会があるたびに、その家に厄介になり、そのおじいちゃん（中村政吉さんという）から、彼が直接見聞した沢木老師や祖道老師の様々なエピソードをうかがったり、手紙や書を見せていただいたりした。安泰寺にゆかりの坐禅の大先達の実話を聞くことが、新米雲水の私にとってどれだけ励みになったかわからない。（中村政吉翁は１９８８年９０才で大往生を遂げられた。自ら坐禅を行じ、仏法の信仰に生きられた居士だった。私はいま翁の襦袢を形見としていただき、使わせていただいている。）

１９９０年夏、アメリカに来てから３年ぶりに日本に帰ったとき、師である渡部耕法老師と一緒に、小諸懐古園を訪れ、祖道老師の記念碑にお参りしたり、弟子の柴田誠光さんにお会いしていろいろ老師の思い出をきかせていただいたことは、忘れがたい思い出となった。

さて長々と私事を連ねてきたが、実は、こういう縁をいただいた横山祖道老師（１９０７～１９８０）の造語である「坐相降臨」ということについて書いてみたかったのだ。

祖道老師の論文や手紙、書、作詩作曲された歌曲など

が数冊の本に、まとめられている。『我立つ杣（そま）』『草笛禅師―横山祖道　人と作品』『草笛禅師歌曲集』（以上　紀尾井書房刊）『横山祖道歌曲集』（横山祖道遺稿刊行会）。直接お話を聞く機会を持たなかった私は、それらの残されたものから、師の坐禅観をしのぶしかない。それらを読むと沢木老師の教えを受け継ぎ、只管打坐をひとすじに行じられた方であることがひしひしと伝わってくる。また、それにとどまらず、坐禅や仏道修行に関して、それを少しのあやまりもなく後世に伝えたいという願心に導かれて、さらなる掘り下げと展開があったことがわかる。

師独自の新しい表現がいくつも発明されており、祖道老師は、「坐禅に対する脚注」（『参究帖（一）』参照）の制作者としても非常に優れた方だった。この点でも、筋金入りの坐禅行者であると同時に、素晴らしい「坐禅の脚注家」でもあった沢木老師の家風をしっかりと受け継いでおられるのだ。

師独特の言葉使いはたくさんあるが、例をあげれば、「坐相唯色」、「万象離念」、「情（みやび）の坐禅」、「坐相みほとけ」、「非思の量」など。そのなかでも「坐相降臨」という言葉は、師が坐禅をどううけとっていたかをよくあらわしている。

祖道老師が出家する前の２８才の頃、山で１人坐禅をしていたら、突然雉が目前に出てきて坐禅をにらんだという。もし師が立っていたら雉はすぐ逃げ出しただろうが、雉は坐禅を人間とは思わなかったから、にらんだのである。師はこれを「雉子体験」と呼び、それによって只管打坐のなんたるかを直観されたという。

一方、祖道老師の師である沢木興道老師も若い時に同じような体験をされている。まだ正式に得度する前の小僧時代（１７才）、ある寺での法要に手伝いに出され、それが終わって時間があいた時に部屋で１人、覚えたばかりの坐禅をやっていた。そこへ今まで自分をこき使っていた婆さんがやってきて、なにも知らずにがらっと襖をあけたら、そこで小僧が坐禅をしている。びっくり仰天して思わず、「南無釈迦牟尼仏、南無釈迦牟尼仏」と本尊様より丁寧に拝んだという。当時の老師は、学問もなにもしていないから坐禅がどんなことかまだ何も知らない。それなのに、平生自分を小僧扱いしている婆さんが、自分の坐禅する姿を仏さんのように拝んでいる…。坐禅の形の尊さと不思議さ。これが、老師の坐禅に対する信仰にとって決定的な体験の１つになったという。

期せずしてお２人が出家前に、本人の意識を越えた坐禅の形（坐相）の厳粛さを直覚するような体験をしているのは興味深いことだ。彼らは声をそろえてこう断言する。「仏道とは坐相が仏であるということを信ずるものである。非思量・無念無想も坐相が非思量・無念無想なのである。坐禅して自分が仏になったり、非思量・無念無想になったりするわけではない。自分はなりっこない。坐禅して坐禅の形が仏・非思量・無念無想であることを信ずるのである。只管打坐とは坐相にのみ用事のある坐禅のことである。坐禅は人間として最上最高の姿である。」と。

祖道老師の坐禅の形＝坐相に対する信仰はさらに、「坐禅と宇宙は合同である。坐相は宇宙そのものが、我はかくのごときものであるといって、人の坐相となって雪山のほとり（釈尊の誕生地＝インド）に天下ってきた（＝降臨）ものである。つまり坐相降臨。自分が坐禅しているという思いが先立っているけれども、実はそうではなく宇宙そのものが坐禅しているのだ。」というところまで深まっていく。だから坐相は坐相だけで独立することができ、その時もはや仏教（理知の源）はなくともよい。坐相さえあれば雉は坐禅をにらむ。坐禅は坐ればもうそれでよい。こうして坐禅が万人のものへと解放される。坐禅とはこのように脚を組み、手を組み、腰を伸ばしあごを引いて云々とこれだけを指示すればこと足りるのだ。「これより過ぐるは悪（理知）よりいずるなり。」

祖道老師は、安泰寺のガリ版刷りの文集（１９７６年号）の巻頭に次のように書かれている。「この『坐相降臨』ということを、もう少し別な言葉でいえば、花が咲いているとか、人間がものを考えているということも、これはすべて天体現象であり天文学的な問題なのだということです。―（中略）―天体から人間をみればこれは天体の一部でしかない。木でも花でも人間でも、人間の行為や、人間の考えのそういうもの一切が宇宙と続いているんだ。」この「宇宙とぶっつづき」という事実を、そのまま素直にこの身にいただいている形が坐禅ということなのだ。

師いわく、人が結跏趺坐して呼吸しているとき、その人は草であり木である。その人は鳥である。その人はただ生命である。その人は実に世界（渓声山色）・天文それ自身である…。

こんな話は、誇大妄想的な空想にすぎないと思われるかもしれない。日常の感覚からかけはなれた絵空事に聞こえるかもしれない。しかし、これと同じようなことを、仏教とは全然違う所から、証拠をあげて語っている三木成夫という人物がいたことを、我々はあらためて思い出さなければならない。私自身は、この２人が共通して指し示しているところから、坐禅や仏教をとらえなおしていく必要があると強く感じている。

「坐相降臨」としての坐禅は、世界中誰にでもできるし、実際にやりさえすれば会得できるはずのものだ。それ以外のことは、それぞれの国柄にあったようにやればそれでよいと、祖道老師は言う。「坐禅の形＝坐相が尊いのであって、あなたの頭脳に値打ちがあるのではない。」ということを、アメリカ人に承知させるのは骨が

おれる仕事だ。徹底した坐相への信仰（「坐相みほとけ」）に裏打ちされた祖道老師の２２年にわたる懐古園での生活は、そんな仕事にかかわっている私にとって、この上ない道標となっている。ほんの５分ほどであったがそのお姿を目撃でき、また師にゆかりの安泰寺につながりのある身になれたことを、ありがたい仏縁と感謝している。

北アメリカ開教総監部・開教センターニュース

※１９９９年１０月２３日、２４日にスタンフォード大学で行われました道元禅師シンポジウムは素晴らしい集まりとなりました。皆様方のご寄付に心より感謝申し上げます。尚、寄付金は総計５４７．５３ドルとなりました。続いて、道元禅師学会が１０月２５日、２６日にスタンフォード大学で行われ、１７名の学者により、道元禅とその歴史的進展について高度な議論が繰り広げられました。

道元禅師シンポジウムにおける発表の英文原稿及び和訳を収録した記念誌が、曹洞宗宗務庁より出版されます。

※ペルー日本人移民百周年記念慰霊法要が１月１６日にペルーのカニエテ市、慈恩寺において行われました。また、三好晃一師が南アメリカ開教総監部の新総監に就任され、同２１日にブラジル・サンパウロにおいて就任式が行われました。それらの法要、式典に北アメリカ開教総監部・開教センターより横山泰賢師、南原一貴師が随喜いたしました。

※慈光・カッツ師がサンフランシスコ禅センターで新しい堂頭となり、２月１３日に晋山式が執り行われました。

※穀蔵良尚師がロングビーチ仏教会を辞任され、５月１日付けで、ハワイ・アイエア太平寺開教師として就任されました。

※曹洞宗宗典・経典翻訳事業が曹洞宗宗務庁教化部国際課の主唱により曹洞禅の国際的な研究と実践に資する英語の資料を提供することを主眼として、進められています。その最初の成果である「曹洞宗日課勤行聖典」が本年度曹洞宗宗務庁より出版されます。

北アメリカ開教センター活動予定
２０００年４～１０月

宗典講読会

日時：　５月１４日、６月４日（午後２時より講義のみ）、
　　７月１６日（午後２時より講義のみ）、
　　８月６日、９月１０日、１０月１５日の各日曜日
　　午前８時３０分　坐禅
　　９時１０分　朝課
　　９時３０分　作務
　　１０時　　奥村正博開教センター所長による講義
会場：　カリフォルニア州サンフランシスコ桑港寺
内容：　正法眼蔵（仏性の巻）

仏教講演会

日時：　５月５日、６月２日、７月７日、８月４日、９月１日、
　　１０月６日の各金曜日
　　午後６時３０分　坐禅
　　７時２０分　提唱
会場：カリフォルニア州サンフランシスコ桑港寺
内容：５月５日　フーリュー・スクローダー師
　　グリーンガルチファーム
　　「仏教の瞑想」
　　６月２日　広開・ロバーツ師
　　サンフランシスコ禅センター
　　「仏教」
　　７月７日　大龍・ウェンガー師
　　サンフランシスコ禅センター
　　「日本文化と仏教」
　　８月４日　明夜・ウェンダー師
　　グリーンガルチファーム
　　「茶道と禅」
　　９月１日　全慶・ハートマン師
　　サンフランシスコ禅センター
　　「仏教の戒律」
　　１０月６日　マーク・ゴナーマン氏
　　スタンフォード仏教研究所
　　「ゲーリー・スナイダーの果てしなき山河（第１回）」

摂心

２０００年６月１０～１６日
場所：ミネソタ州・宝鏡寺

２０００年１０月２０～２６日
場所：ペンシルバニア州・平等山禅堂

開教師・伝道教師研修会

２０００年７月２１～２３日
場所：ロサンゼルス・両大本山北米別院禅宗寺